メールマガジン版 音楽の世界

第１５号　日本音楽舞踊会議（CMDJ） ２００９年１０月３日（土）発行
The CONFERENCE of MUSIC and DANCE, JAPAN
〒 **169--0075**　新宿区高田馬場 **4-1-6**　寿美ビル３０５号　TEL&FAX 03-3369-7496
http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/　E-mail:　**onbukai@mua.biglobe.ne.jp**

■メールマガジン版『音楽の世界』第 15 号（Furesh　Concert　特集号について）

日本音楽舞踊会議　電子出版部長：中島洋一

本年４月以来、約半年を経ましたが、メールマガジン版『音楽の世界』第 15 号を発行いたします。今回は『CMDJ2009 年オペラコンサート～愛の喜びと悲しみ』開催にちなんで、“オペラコンサート”特集号といたします。

なお、掲載記事の一部は、印刷版『音楽の世界』2008 年 10 月合併号と重複します。

（メールマガジン版『音楽の世界』編集責任者　中島洋一）

メールの宛先：中島洋一　yoichi_n@wa2.so-net.ne.jp

☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆★+*☆

♣　メールマガジン版　『音楽の世界』第15号の内容　♣

１）新しい演出を切望したプッチーニ　　中村 敬一　P. 2

２）二期会の『蝶々夫人』でデビューする文屋小百合さんに訊く
　文屋小百合（ソプラノ）　訊き手：中島洋一　P. 4

３）プッチーニについての私見　　中島 洋一　P. 9

４）**CMDJ** オペラコンサート『愛の喜びと悲しみ』プログラム　P.13

５）『愛の喜びと悲しみ』の出演者に訊く　P. 15

６）過去開催のオペラコンサートの出演者と演奏曲目　P.16

６）**10** 月～ **12** 月の日本音楽舞踊会議関係のコンサート情報　P.22

７）編集後記　P.24

+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆★+*☆

新しい演出を切望したプッチーニ　　オペラ演出家：中村敬一

ジュゼッペ・ヴェルデは、終の棲家～貧しい芸術家のための老人ホーム「憩いの家」～を完成させたあと、1901年にミラノで脳卒中のため亡くなった。この時、ジャコモ・プッチーニは1900年にトスカを書上げ、バタフライの準備をしていた。1902年（または1903年）の2月下旬、珍しがりやの性格から、自動車を手に入れ、さっそく乗り回していたところ(ちゃんと運転手付きだったようだが)、交通事故を起こし、脚を骨折する。1910年には、アメリカを舞台にした『西部の娘』、その後、フランツ・レハールのオペレッタの成功を夢見て、ウィーンの劇場のためにドイツ語で準備を始めたLa Rondine「つばめ」は、第一次世界大戦の開戦で、敵国のためのオペラを書くのかと、批判される中、紆余曲折を経て、1917年、結局、イタリア語のオペラとして完成した。

そして、プッチーニの完成された最後の作品となったのが”Trittico”「三部作」（外套、修道女アンジェリカ、ジャンニ・スキッキ）である。「三部作」を完成させた1918年は、既に第一次世界大戦の最中、結果、欧州での初演を断念し、アメリカという新天地、ニュー・ヨークのメトロポリタン・オペラ・ハウスで、初演されることとなる。この年は、ドビュッシーの没年、ストラヴィンスキーが「兵士の物語」を、リヒャルト・シュトラウスが「ナクソス島のアリアドネ」を書き上げた年でもある。

この頃、映画の技術は飛躍的に進歩し、ラジオ放送の普及も進む。20世紀初頭の偉大なオペラ作曲家たちの新しいオペラへの計り知れぬ努力と試みを経ても、市民の娯楽は新しい媒体へ傾斜していく。既にオペラは《時代遅れのマンモス》となりかけていたのだ。そんな時代の流れの中で、オペラの書かれる時代は終焉を迎えようとしていた。プッチーニのオペラはそんな中、最後の煌めきのようにイタリアオペラの頂点を極めるのだ。

「プッチーニのオペラは、映画音楽のようだ」と言う人がいるが、それは正しくない。「プッチーニのオペラは映画そのもの」なのだ。音で書かれた映画。もし、プッチーニが現代に生きていたらきっとオペラを映画という媒体で再現させたであろうとい

うことだ。

だから、彼のオペラの中の風景は、まるで映画一シーンのように強烈で現代的だ。「三部作」の各作品の冒頭に描かれたのは、人々の生活、息遣い、汗の匂い、揺れ動く心の襞……アンビバレンス。それは、トスカ開幕のような正にオペラ的な手法とは違う、描写が続く。プッチーニは、初期の作品、例えば「ボエーム」でさえ、人の歩く足の運び，水滴の音さえスコアに書き込もうとした。その後、ヴァグナーの楽劇の考え方、ドビュッシーの音楽等にも影響を受け、彼の手法は「耳で聞く映画」のように立体的でヴィジュアルに変化していく。内容が同時代のヴェリズモと似た「外套」でさえ、その手法は直情に訴えるだけの直截的なものではなく、複雑な人間の内面のドラマが描かれている。クラクションの音（実際のサウンド・エフェクトとして楽譜に書き込まれている)、労働者の姿、街を行き交う人々のざわめき。それらがスコアの中に克明に書き込まれているのだ。

プッチーニ自身、自動車を乗り回し、交通事故を起こし入院し、妻には身の回りの世話をしてくれた小間使いの娘との関係を疑われ、それを苦に小間使いの娘は自殺し、残された小間使いの家族は、亡骸が、まだ男性を知らない処女であることを医学的に証明して、損害賠償を請求する。まるで、写真週刊誌にでも載りそうなスキャンダラスな人生である。

それは、シルクハットにステッキで馬車に乗り込み、イタリア統一国家の第一回国会議員となり、後にリラ札の肖像に選ばれ、晩年は田舎で畑仕事の隠居と決め込んだ僅か半世紀先輩のヴェルディとは大きな違いである。リソルジメント（イタリア統一運動）の旗頭と担がれたヴェルディとは違って、彼は等身大の現代人。プッチーニはオペラに現代を持ち込んだのだ。

「ボエーム」や「トスカ」「蝶々夫人」などの台本作家イルリカへ1912年に宛てた手紙の中でこう語っている。

劇場での演出ということは、非常に重要だね。……例え題材が新しくなくても我々は新しい演出手段によっては、独創的に見えるようにすることができるのだ。……我々の黴の生えたような古臭い舞台装置は、もう退屈なものになってしまった。……僕は陳腐ではない演出を行おうとする試みに対しては、どんなものにも尊敬を払う。(モスコ・カーナ著　加納泰訳　「プッチーニ」音楽の友社刊)

彼が楽譜に記したドラマは、既に時代を超えてしまっていたのかもしれない。プッチーニこそ、80年後の現代の我々の手による、当時実現できなかった舞台の再現を望んでいるのかもしれない。「三部作」の数年の後にプッチーニは現代の病、喉頭癌に冒され、ベルギーでの放射線治療の甲斐も無く、白鳥の歌となった「トゥーランドット」

を未完のまま生涯を閉じたのである。ヴェルディが、芸術家のための老人ホーム「憩いの家」に、二人目の妻、ジュゼッピーナ・スポレットーニ（椿姫の誕生のキッカケともなった女性である）と仲良く埋葬されたのとは、なんと、対照的な人生だろうか！！

我々は彼を現代人として捉えようではないか。それが、20世紀の人、プッチーニの望むことなのだから。

中村敬一略歴

1957年東京に生まれる。はじめ声楽家を志し、武蔵野音楽大学同大学院で声楽を専攻、卒業後、鈴木敬介、栗山昌良、三谷礼二、各氏のアシスタントとして演出の研鑽を積む。1989年より、文化庁派遣在外研修員として、ウィーン国立歌劇場にて、オペラ演出を研修。二期会公演「三部作」、東京室内歌劇場公演「ヒロシマのオルフェ」、日生劇場公演「笠地蔵・北風と太陽」で、演出力が絶賛され、1995年、第23回ジローオペラ、新人賞を受賞。また、２０００年新国立劇場デビューとなった「沈黙」が、高く評価される。２００１年ザ・カレッジ・オペラハウス公演「ヒロシマのオルフェ」では、大阪舞台芸術奨励賞を受賞。国立音楽大学客員教授　大阪音楽大学講師　大阪教育大学講師

中村敬一ホームページ

http://www.ops.dti.ne.jp/~k1-naka/

☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆★+*☆

《インタビュー》
二期会の『蝶々夫人』でデビューする文屋小百合さんに訊く

訊き手：中島洋一

中島：こんにちは。実は貴女の歌は、貴女の学生時代だけでなく、2005 年に東京文化会館で行われた東京音楽コンクールで優勝された時の演奏を、本会の戸引小夜子さんと一緒に聴いているのですよ。その時から 4 年を経た今年の 10 月、二期会のオペラ『蝶々夫人』の蝶々さんでデビューされることになったのですが、おめでとうございます。

文屋：ありがとうございます。

中島：ところで文屋さんは、いままでに、バロックのオペラ、例えばヘンデルの『ジュリアス・シーザー』のクレオパトラの役などもおやりになっていますね。18，19 世

紀のオペラとバロックのオペラのどちらに魅力を感じますか？

文屋：そうですね。それぞれに魅力を感じていますが、バロックの装飾を自由につける唱法など、テクニックで感情の起伏を表現するというやり方に、プッチーニのような感情表現とは違ったある意味での新しさを感じ、魅力的に思います。

中島：日本の歌曲は歌われますか？

文屋：ええ、山田耕筰の歌曲などを歌わせてもらいましたが、まだまだ素晴らしい曲が沢山あるので、もっと勉強して増やして行きたいと思っています。

中島：フランス歌曲も歌われていますね。

文屋：ええ、大学時代に勉強させて頂き、コンクールにも出させて頂きました。フランス歌曲の独特な世界にも魅力を感じます。いずれの歌曲も繊細な表現テクニックが必要になります。しっかり勉強していきたいと思います。

中島：ドイツのオペラなどはどうですか。昔は二期会ならドイツ物が中心だったと思います。

文屋：今のところそのチャンスはありませんが、機会があったらやらせて頂きたいと思います。

蝶々夫人について

中島：ところで、今回は『蝶々夫人』という悲しい役に挑戦しますが、喜歌劇のような楽しいオペラと、今回のような悲劇的な作品と、どちらが好きですか？

文屋：どちらかというと、明るい方が好きかもしれませんね。（笑）でも、『マダム・バタフライ』は、やればやるほど魅力を感じます。自分の娘が２歳なるので、ほぼ同じくらいの子供を持つ蝶々夫人も、きっとこうだったに違いないと想像すると、熱い感情が込み上げてきます。そういう中で自害してしまうのが、まだ自分には理解できないところです。当時の時代背景では、子供のためにそうするしかなかったのかもしれませんが。

中島：［死]がないと、悲劇としての盛り上がりをつくれませんからね。それと[当時の]

とおっしゃいましたが、原作者もプッチーニも、当時の日本をそれほど深く理解はしていなかったと思います。でも、一人の男性を一途に想い続ける薄幸の女性は、プッチーニの好みのタイプなので、プッチーニが強い思い入れを抱いてこの作品を書き上げたことは間違いないでしょう。自害は、子供のためというより、女としてのプライドがそうさせたのでしょう。そういう強いプライドは、武家の娘ならありそうですが、蝶々さんは芸妓だったわけだし、武家の娘はよほどの事情がないかぎり、芸妓にはならないでしょうから。

文屋：芸妓だと、どうなんですか。

中島：芸妓にも、自分が好いた男のためなら場合によっては死を選ぶという一途な愛もあるでしょが、蝶々さんに比べ、もっと控えめで退（ひ）いたところがあるでしょう。ところで、貴女なら子供を渡しますか？

文屋：いえ、今わたしが同じ状況でしたら渡さないと思います。

中島：まあ、経済力もなく、ちゃんとした教育を受けさせるのも難しいし、米国の士官と芸妓というお互いの立場の強さの違いもあって、子供を渡す方を選んだのでしょうが。

文屋：原作の方は、蝶々夫人が死んだ後、スズキが子供を連れて逃げるという設定になっているらしいのです。もし死なないで、子供を連れて逃げる選択肢があれば、わたしならそうしたかもしれませんね。（笑）

中島：逃げないで、子供は渡さないと主張すればいいじゃないですか。

文屋：そうですね。

中島：ところでもし、貴女が蝶々夫人だったたら、ずっと夫が帰るのを待ち続けますか？

文屋：私は割り切る方なので、待っても１年、子供がいても２年位であきらめてしまうでしょう。

マリア・カラスについて

中島：ところで、プッチーニが書いたオペラの中で、他にどんな役が好きですか。

文屋：ミミは、私が最初に触れた役です。　それに、大学院の論文で『ボエーム』を書いておりますし、ミミは好きですね。

中島：ミミは貴女のイメージと声に合っていると思います。ミミは純情ですが、控えめで、むしろ日本的な感じもしますね。

文屋：ええ！逆にそうですね。むしろ、蝶々夫人のようなタイプの女性は当時の日本にはあまりいなかったのではないかという気がします。

中島：さっき言ったように、武家の娘なら、というところですね。

　ところで、『トスカ』はお好きですか？

文屋：『トスカ』はアリアにちょっと触れた程度で、まだ語れるだけのものを持っていません。

中島：わたしは、トスカというと、マリア・カラスを連想してしまうのですよ。まさに彼女の人生は『歌に生き、愛に生き』そのものですね。

文屋：わたしもそう思います。歌に生き、愛に生きるということは、実は非常に難しいことだと思います。普通どちらかになってしまいます。あれだけの舞台をこなしながら、あれだけの熱恋が出来るカラスは素晴らしいと思います。

中島：彼女には古風なところがあって、オナシスの正妻になりたいという思いが強かったのでしょうね。でも、正妻の座をケネディ大統領未亡人のジャクリーンに奪われてしまい、一度は絶交しますが、またオナシスに言い寄られて、寄りを戻すんですね。彼女は愛のためなら歌を捨ててもよいというほど、強い気持ちだったのでしょうが。オナシスに先立たれた後は、寂しい死に方をしますね。でも、一概に彼女の人生が不幸だったとは言えないでしょうね。

文屋：ええ、普通の人では経験できないような、密度が濃く、深い時間を過ごしているでしょうから。

これから挑戦してみたい作品

中島：ところで、これから挑戦してみたい作品はなんですか。

文屋：ヴェルディは声楽的技巧の難易度が高くて難しいのですが、『椿姫』のヴィオレッタは是非ものにしたいです。それから、『ボエーム』のミミは得意役としたいし、日本のオペラでは『夕鶴』もやってみたいです。『蝶々夫人』は、本当はもう少し年齢を重ねてからでいいと思っておりましたが、意外に早くチャンスを頂きました。

中島：なぜ、もう少し待とうと考えたのですか。

文屋：もう少し声が成長してからが良いと考えたからです。でも現在稽古させて頂いている中で、声の面でも演技の面でも大変勉強させて頂いており、この歳で蝶々さんの役を頂いたことに感謝しています。

中島：自害する前に、子供を抱き寄せ[私の顔を憶えていて]と歌うところなど、ほんとうに切ないですね。女性なら身につまされるほどその気持ちが分かるのではないですか。

文屋：まだ２歳です。憶えることは難しいでしょうし、もし憶えていてくれなかったら自分の存在そのものが消えてしまうわけですから。あの場面を演ずるとき、つい感情移入してしまいます。

中島：役に飲み込まれて泣いてしまってはいけませんね。演技する自分を、もう一人の自分が冷静に見つめていないと。

文屋：役に飲み込まれないで、演技するということは難しいですね。自分が泣くのではなく、お客さんを泣かせる演技が必要なのですから。

中島：あそこは、時代を超えた、普遍的な人間の悲しみが描かれていると思います。それをお客さんに熱く伝えることが出来れば、オペラの素晴らしさを、もっとわかってもらえるかもしれませんね。

文屋：それが出来ればいいですね。

中島：それから、この記事は本会の機関誌『音楽の世界』のオペラコンサート特集号に掲載されますが、本会のオペラコンサートには、貴女より若い声楽家が沢山出演します。そういう人達も含め、若い人達に何か伝えたいことがありますか。

文屋：ええ、若い時には多くの可能性が残されています。学校を出てからが飛躍のチャンスだと思います。ちょうど声も整って来て、言われてきたことの意味がわかってきて、やったことがどんどん身についていく頃だと思いますので、色々なものに挑戦して欲しいと思います。

中島：本日はどうもありがとうございました。では、10 月の本番に向けて頑張ってください。

2009 年 9 月 5 日　中島宅にて収録

文屋小百合〈ソプラノ〉プロフィール

国立音楽大学音楽学部声楽学科卒業、及び同大学大学院音楽研究科声楽専攻オペラコース修了

二期会オペラストゥーディオ第 45 期修了、修了時に優秀賞を受賞、

二期会オペラストゥーディオ・プロフェッショナルコース第５期修了

中山早智恵氏に師事

第 12 回　日仏声楽コンクール入選、第 21 回ソレイユ新人オーディション音楽現代新人賞（１位）を受賞し、ウィーン国立音楽大学が主催するウィーン国際夏期アカデミーに招待される。第３回東京音楽コンクール声楽部門第１位、優勝者コンサートにて東京交響楽団と共演

オペラでは、「フィガロの結婚」花娘役、「コシ・ファン・トゥッテ」のフィオルディリージ役に出演、「ラ・ボエーム」ミミ役に出演、二期会ニューウェーヴオペラ、「ポッペアの戴冠」タイトルロール：ポッペア役に出演、「ジュリアス・シーザー」のクレオパトラ役に出演、日本オペラ団体連盟・新人育成オペラ公演「ヘンゼルとグレーテル」の眠りの精に出演、新国立劇場主催小劇場オペラ「セルセ」アタランタ役に出演　コンサートでは、モーツアルト「孤児院ミサ」「ハ短調大ミサ」「ヴェスペレ（夕べの祈り）」、ドヴォルザーク「スタバト・マーテル」の宗教曲や、ベートーヴェン「第九」のソリストとして数々のコンサートに出演

現在、二期会会員

★★★

は理解できた。いまでも、トスカがスカルピアを刺殺する場面、カヴァラドッシが銃殺される場面、トスカが自殺する場面は憶えている。

しかし、その後、プッチーニとはあまり縁がなくなる。音大時代には、ワグナー、ドビュッシー、ラヴェル、ベルクなどの作曲家が興味の対象となり、オペラ系の作品ではワグナーが好きで、トリスタンをはじめ、かなり多くのボーカルスコアを揃えていた。プッチーニの作品については30代の中半に、オペラを自作するまでは、あまり触れることが無かったのである。

それでも音大を生活の場としているなら、当然、プッチーニの有名なアリアくらいは、聴く機会がある。耳に入ってくるプッチーニの音楽は嫌いではなかった。

ストラヴィンスキーへのインタビューを本にした『118の質問に答える（1961年出版）』の中で、ストラヴィンスキーは「ディアギレフは笑いながら死んだ。（そうして、どんな音楽にも劣らず、本当に好きだった《ラ・ボエーム》を歌いながら」と回想している。実はこの部分は、脳を患って死んだラヴェルの悲惨な死を語るため、ディアギレフの幸せな死を対比させて述べたものだが、《ラ・ボエーム》の何を歌いながら死んだのかは書かれていない。しかし、死の間際に歌った心の歌が《ラ・ボエーム》だったことは、なんとなく判るような気がした。

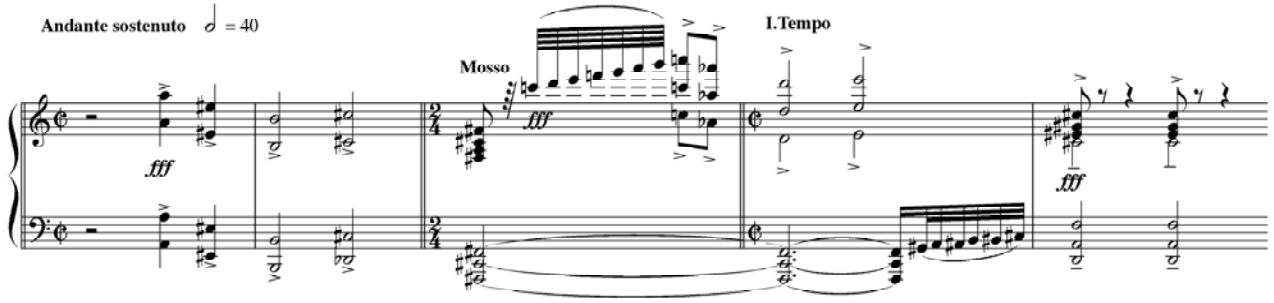
芸術作品には、強い衝撃を受ける作品、偉大さに圧倒されそうになる作品があるが、その一方、自分の心に染みこんで来るたまらなく好きな作品というものがある。私にとってマーラー、太宰治などは後者に入るが、プッチーニも多分、こちらに入るであろう。

プッチーニの作風

《現代音楽》という枠組みに囚われていた若い頃は、プッチーニの芸術を、現代につながらない過去の伝統世界の芸術という先入観でみてしまっていたが、そのような枠組みを取っ払って見直してみると、気づくことは、彼が同時代に現れた様々な新しい音楽を排除せずに、その成果の多くを自分の音楽に採り入れていることである。例えば「私の名はミミ」の冒頭の旋律線と和声からは、そっとワグナーの顔が覗き、「歌に生き、恋いに生き」の冒頭の三和音の平行和声は、ドビュッシーを連想させる。特に平行和声や、内声に和音を持ち上下の外声が同じ旋律を奏する輪郭法的手法は、プッチーニが好んで多用する。

また『蝶々夫人』では、“さくら　さくら”、“かっぽれ”など、多くの日本の旋律が採り入れられているのは、ご存知の通りだが、『トゥーランドッド』では、よりこなれた形で、中国の５音音階が採り入れられている。さらに、同作品では、複調、ポリ

コードといった当時の前衛的作曲家の間で流行った手法もみられる。以下はオペラの冒頭の部分の譜例である。



ユニゾンで現れたトゥーランドッドの動機が、3小節目の頭で嬰ヘ短調の主和音に落ち着くと、短三度上に同じ動機が姿を現す。３小節目の最後の変イ音は本来嬰ト音であり、嬰ヘ短調の主和音の上にイ短調の動機が乗る復調の形態が現れている。５小節目の和音は、下のDmの和音の上に、C#Mの和音が乗るポリコードの形態をとっている。しかし、上の和音のC#,E#,G#のうち、E#はFの異名同音であり、C#,G#はそれぞれ、DとAの倚音が付加音化したもので、よく響くように配慮されている。このような和音の重ね方は、プッチーニ、ラヴェルなどが好むところである。

しかし、プッチーニは単に流行を追う作家でもなければ、もちろん頑固に外からの影響を排除する作家でもない。彼は、自分の好みに合致したものについては、何でも積極的に採り入れ、自分の芸術の材料として消化する胃袋と技量を持った作家であった。そして様々な手法は、劇的効果を高め、音楽ドラマとしてのオペラに、迫力と魅力をもたらすために使われる。前述の『トゥーランドット』の冒頭もトゥーランドット姫の頑なで冷たい性格を暗示し、このオペラの展開を予感させる効果を狙ったものであろう。また、彼が好んで用いる示導動機は、ワグナーの『指輪』４部作のように説明的に用いるのではなく、愛の記憶を呼びさますように使われ、聴き手を主人公の心の世界に引きずり込んで行く。彼は劇的効果を求めて、同じ音型を転調して反復する手法を多用するが、劇的効果の追及はドラマを完結させる終止にも及ぶ。蝶々夫人の最後はロ短調の主和音（ロ、ニ、嬰ヘの和音）ではなく、ロ、ニ、ト音の和音で終わっている。嬰ヘ音をト音に変えたことで、蝶々夫人の死、不在を強烈に印象づけているのだ。

プッチーニが拘ったもの

プッチーニが最も好み、また拘ったのは、女性であろう。彼は日常生活においては、女を泣かせたこともあろうが、逆に女の強い嫉妬心、独占欲に苦しめられたこともあろう。しかし、彼は自分の芸術においては、美しい女性像を追及し続けた。

例えば、蝶々夫人の登場場面では、すぐには舞台に姿を見せず、愛の主題が増三和音に入るところで、コーラスとハープに導かれ、舞台裏から蝶々夫人の声が聴こえて来る。このシーンは夢の世界で妖精に出逢うように、神秘的で美しい。また、ずっと待ち続けた夫が帰って来たと知り、有頂天になり、部屋を花で満たそうとしたり、障子に穴を開けて、帰って来る夫の姿をのぞき見しようとするシーンなども、女の可愛らしさ、いじらしさが見事に表現されている。そして、最後は、自身のプライドと心にある理想の愛を守るために、彼女は死を選ぶ。このオペラは日本を舞台にしてはいるが、日本女性を描いたのではなく、プッチーニ自身が求めた女性像を描いたのである。

プッチーニは最後まで、女と愛のイメージを追い続けた。それが、あの叙情的なプッチーニ節を生み出した。そして、様々な音楽要素を取り入れ作風が変化して行っても、決してプッチーニ節を捨てることはなかった。それは『蝶々夫人』の“ある晴れた日”や、『トゥーランドット』の王子のアリア『誰も寝てはならぬ』や、リューのアリアを聴けばすぐ判る。彼はプッチーニ節により、多くの人々から愛されたが、一部の専門家から通俗的過ぎるとの批判を受けた。しかし、彼の後輩に当たるラヴェルやストラヴィンスキーなどの大作曲家たちは、プッチーニの芸術家としての力量と存在意義をちゃんと評価している。

第二次大戦後の現代音楽の世界では、何を書くかより、どのような方法で書くかの方が重要視されてしまった。そして、「もう音楽資源は食いつぶされてしまい、新たに書くべきものは何もなくなった」などと、まことしやかに言われたことがあった。しかし、人に音を使って書きたいこと、書くべきことがある限り、音楽資源の枯渇などあろう筈はない。

プッチーニは、自分の書きたいものを書くために進化し、その一方で、そのために自分のスタイルを守り通した。半世紀に及ぶプッチーニの歩みは、現代芸術という迷路を歩く我々に、なんらかの道標を示してくれているのではなかろうか？

本会理事・相談役（なかじま・よういち）

舞台写真：プッチーニ　三部作より

提供：中村敬一氏

CMDJ 2009 年オペラコンサート

『愛の喜びと悲しみ』

《ごあいさつ》

本会では、2005年12月2日に、Opera Concert 『愛・憎しみ・血の惨劇！』、2007年９月14日に、喜歌劇コンサート『愛のたくらみ』、昨年は『愛と夢の世界へのお誘い』と、いずれもサブタイトルに“愛”という言葉を含む、オペラコンサートを開催してまいりました。従って本年の公演で、“愛”のシリーズも４回目を迎えることになります。

昨年は後半の演目で『ヘンゼルとグレーテル』を取り上げ、質素ながら愛らしい大道具小道具を沢山使い、歌い手達も、セリフあり、歌ありで、舞台を飛び回って演技いたしましたが、今年はアリアによる、歌中心のコンサートをお送りします。

そして、フランス・オペラ、イタリア・オペラの名作のアリアを通して、様々な愛の姿を描いてみたいと思います。

“愛”は、人間にとって最も大切なものであり、作曲家はオペラを通して、激しい愛、ひたむきな愛、悲しい愛、したたかな愛など、様々な愛の姿を描いてまいりました。愛とは、内に秘められた人の命のマグマが噴火する噴火口のようなものかもしれません。そしてそれは、創作家の創作欲を最も刺激するテーマでもあります。その熱いマグマを汲み上げ、ご来場していただいた皆様に伝えるのが、出演者をはじめとする我々のつとめであります。まだまだ、勉強不足で至らない点も多々あるとは存じますが、そのつとめを果たそうと、出演者、スタッフ一同、本日の公演を目指して、努力を積み重ねてまいりました。

もし、聴衆の皆様方に、喜びと感動を与えることが出来れば、それほど嬉しいことはありません。本日は、どうかリラックスして、心行くまで音楽をお楽しみいただきたいと存じます。

日本音楽舞踊会議　コンサート実行委員：　浦富 美、中島 洋一
公演局長　北條 直彦
理事長　戸引 小夜子

CMDJ2009 年オペラコンサート『愛の喜びと悲しみ』

会場：すみだトリフォニーホール（小）ホール）

2009 年 10 月 8 日（木）　午後 6:30 開場／ **6:30 開演**

入場料金：全自由席：3,000 円

主催：日本音楽舞踊会議／後援：月刊『音楽の世界』

連絡先：コンサート実行委員長　中島洋一（TEl：042-535-3294）

E-mai：yoichi_n@wa2.so-net-ne.jp

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

《プログラム》

【前半】

ドリーブ　歌劇『ラクメ』より　“鐘の歌”

歌：齋藤 希絵（ソプラノ）

サン＝サーンス　歌劇『サムソンとデリラ』より　“私の心はあなたの声に花開く”

歌：湯川 亜也子（メゾ・ソプラノ）

グノー　歌劇『ファウスト』より　Gounod [Faust]～

“門出を前に”　歌：中山 弘一（バリトン）

“宝石の歌”　歌：佐々木寿子（ソプラノ）

ドニゼッティ　歌劇『愛の妙薬より』“人知れぬ涙”

歌：土屋清美（テノール）

マスカーニ　歌劇『カヴァレリア・ルスチカーナ』より　“ママも知る通り”

歌：高橋 順子（ソプラノ）

マスネー　歌劇『マノン』より

“私まだぼんやりしているの”　／“さようなら、私たちの小さなテーブルよ”

歌:小木曽　実奈(ソプラノ)

“私はどんな道でも女王のように歩きます!”

“マノンのガヴォット「みんなの声が愛の言葉をささやくとき」”

歌:齊藤 希絵(ソプラノ)

----------（休憩）----------

【後半】

ビゼー　歌劇『真珠採り』より　“昔のように　夜の暗がりの中”

歌：佐々木 寿子（ソプラノノ）

“嵐は静まり”　歌：中山 弘一（バリトン）

マスネー　歌劇『ウェルテル』より　“手紙の歌”

歌：湯川 亜也子（メゾ・ソプラノ）

プッチーニ（Puccini）の歌劇から

『ラ・ボエーム』より　“さようなら”

『トスカ』より　“歌に生き、愛に生き”

以上２曲　歌：増子 あゆみ（ソプラノ）

『蝶々夫人』“ある晴れた日に”　歌：高橋 順子（ソプラノ）

『トゥーランドット』“だれも寝てはならぬ”

歌：土屋 清美（テノール）

アンコール　“当日のお楽しみ”　歌：佐藤光政＆出演者全員

司会：佐藤光政／ピアノ伴奏：亀井奈緒美（全演目）

CMDJ2009 年オペラコンサート『愛の喜びと悲しみ』

《出演者メッセージ》（出演順）

齋藤 希絵（さいとう　きえ：ソプラノ）

この度は、オペラコンサートに出演出来ますこと、大変嬉しく思います。

今回私が歌わせていただく２曲は、どちらもフランスのオペラ作品ですが、ヒロインの性格は真逆といっても良いほどに違います。インドの高僧の娘で気高く純粋な‘ラクメ’、数々の男性を惑わし、享楽の日々を送る‘マノン’。

この正反対の２人のヒロインの、それぞれの魅力をお伝えできれば幸いです。

湯川亜也子（ゆかわ　あやこ：メゾ・ソプラノ）

この度は演奏会出演の貴重な機会を頂き、ありがとうございます。お声掛け下さいました中島先生に感謝致します。

昨年はオペラ『ヘンゼルとグレーテル』に出演させて頂き、出演者やスタッフの方々と共に、時間をかけて一つの舞台を造り上げていく中でたくさんの事を学ばせて頂きました。

今回、演目は様々ですが、“愛の喜びと悲しみ”というテーマに沿った今日限りの“一つの物語”に携われる事を光栄に思います。

私はサン＝サーンス作曲『サムソンとデリラ』からデリラのアリア、マスネ作曲『ウェルテル』からシャルロットのアリアを歌います。サムソンへの憎しみがあるからこそ生まれるデリラの愛、踏み込んではならないからこそ苦しみ、燃え上がるシャルロットのウェルテルへの愛を情熱的に表現したいと思います。日々温かくご指導下さる秋山理恵先生に心から感謝致します。

中山 弘一（なかやま　こういち：バリトン）

前回のフレッシュコンサートに続き、今回の演奏会に出演させて頂きまして期待と緊張に胸膨らませております。ベテランの皆様から私を含めました新しい才能の方々と共演させて頂く貴重な機会を下さった諸先生方に感謝の意を込めると共に、イタリアオペラとフランスオペラを同じ機会に演奏するという画期的な企画に私自身非常に楽しみであります。様々な演奏会がある中、一つの

演奏会で二つのオペラの世界が楽しめるといった意味でお客様方に楽しんでいただけるように、日々精進し頑張りたいと思います。

佐々木寿子（ささき　ひさこ：メゾ・ソプラノ）

４月のフレッシュコンサートに続き、今回このような演奏会に出演出来る事をとても嬉しく思います。　オペラに登場する人物たちが織り成す人間模様や、一つとして同じ物のない様々な愛の形を表現出来ればと思っております。

小木曽実奈（こぎそ　みな：ソプラノ）

今回アリアコンサートの開催に際し、出演させて頂くことを大変光栄に思っております。
私はジュール・マスネ作曲、歌劇『マノン』から２曲のアリアを歌わせて頂きます。
どちらもマノンという女性の享楽性や軽薄さ、コケティッシュな魅力が十分に描かれています。
１幕の「私はまだぼうっとしているの」では、彼女のあどけなく気まぐれな性格をよく見せているし、２幕の「さようなら、小さなテーブルよ」は、とても悲痛的ですが、情熱を秘めた美しい音楽です。２つの曲にのせ、魅力溢れるマノンを少しでも皆様にお届けできればと思います。
今日に至るまでお力添えを下さった多くの方々に心から御礼申し上げます。

高橋順子（たかはし　じゅんこ：ソプラノ）

この度は、オペラコンサート『愛の喜びと悲しみ』に出演させていただける事になりまして、中島先生を始め、皆様方に深く感謝申し上げます。声楽曲には、歌曲や民謡、宗教曲、オペラなどなど....。いずれも素晴らしく魅力的ですが、その中でも、オペラを聴いたり観たり、そしてアリア部分だけでも、勉強し、唱うことには、特別な喜びを感じます。
解釈もテクニックも、大変力不足な私ですが、大好きなプッチーニとマスカーニの２曲を歌わせていただける事を、とても幸せに思います。そして、いろいろと御指導をいただきながら、私も大切に自分の歌を、歌って参りたいと思っております。

土屋清美（つちや　きよみ：テノール）

　前回のコンサート「愛・憎しみ・血の惨劇」以来の出演になります。
前回は「カルメン」をハイライト風に演奏させて頂きました。
今回はドニゼティの「愛の妙薬」から”人知れぬ涙”を、そしてプッチーニの「トゥーランドット」から”だれも寝てはならぬ”の２曲を歌うことになりました。
　２曲ともテノールのアリアの定番ではあります。”人知れぬ涙”はリリコレジェーロの持ち役である純情な農村青年ネモリーノが村地主の娘アディーナを想う純粋な気持ちが美しい旋律となった名アリア。
”だれも寝てはならぬ”は第３幕第１場で、ダッタンの王子カラフが、氷のように冷たい姫の心も、自分の愛の力で溶かしてみせると、確信しながら歌うアリアです。二つの違う「愛の姿」を表現出来ればと想います。
　とくに、”だれも寝てはならぬ”はトリノで開かれた冬季五輪で、開会式でパヴァロッティが歌い、フィギアの荒川静香が金メダルを取った時に使った曲として一般に知れ渡っている曲ですのでなぜか緊張しますね。
最後に、中島洋一様をはじめこのコンサートを支えて下さっている方々に感謝申し上げます。

増子あゆみ（ますこ　あゆみ：ソプラノ）

　４月に行われたフレッシュコンサートに続き、今回も歌わせて頂けることをとてもうれしく思います。
今回は“愛の喜びと悲しみ”。それは誰もが経験したことと思います。人間において『愛』は
なくてはならないもの。『愛』を明確に表現することは難しいが、古来から人を引き付けてやまないものである。
音楽においても重要な要素であり、オペラでは『愛』がドラマを動かしていると言っても過言ではない。
　今回私が歌うのは、Ｇ.プッチーニ作曲の『ラ・ボエーム』の第三幕で主人公のミミが歌う「あなたの愛の呼ぶ声に…」、
そしてプッチーニの中でも名曲である『トスカ』の「歌に生き、愛に生き」です。プッチーニらしい甘いメロディーにのせて、それぞれの『愛』を表現できればと思います。

亀井奈緒美（かめい　なおみ：ピアノ）

とても素敵な歌の案内人、佐藤光政氏のもとに 8 人の個性ある歌手の方々がイタリアオペラ、フランスオペラの有名なアリアを演奏します。私はその伴奏をさせて頂きとても幸せです。お客様がそれぞれのアリアを聞いて、その前後はどんな曲なのだろう、すべての作品を聞きたい、知りたいと思って頂ければ幸いに存じます。・・そういう私も今回の演奏に当たりそれぞれのアリアを含むオペラについて、その物語を知り全曲カットなしに演奏したいと思った一人です。当日は皆様に楽しんで頂けますよう、そしてソリストの方々が気持ちよくお歌いになれますよう心をこめて演奏したいと思っております。

佐藤 光政（さとう　みつまさ：バリトン＆司会）

1966 年東京芸術大学音楽学部卒業。1973 年第 7 回パリ国際音楽コンクール入賞。同年、第 42 回日本音楽コンクール声楽部門第 1 位入賞。1990 年《春琴抄》でフィンランドのサヴォリンナ・オペラフェステヴァルに参加。第 18 回ジロー・オペラ賞受賞。1994 年に 2 枚組 CD『佐藤光政　日本の抒情を歌う』を発刊。2000 年に、『日本の名歌を歌う』を発刊。
2005 年から始まった CMDJ オペラ公演において、ずっと司会役および重要な役を担当し、公演の中心存在として出演し続けている。
磯谷威、大槻秀元、柴田睦睦、河本喜介の諸氏に師事。二期会会員、東京室内歌劇場、日本音楽舞踊会議会員、PCM 事務所所属。

（註：今回のコンサートでは佐藤光政氏は司会役を中心に担当するということで、メッセージは省きます。）

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

昨年の公演より

『ヘンゼルとグレーテル』
第 2 幕
天使のパントマイム

◆過去開催 CMDJ Opera Concert　演目&演奏者◆

※日本音楽舞踊会議のオペラコンサートは 1900 年代にも開催されたことがありましたが、定期的　に開催されるようになったのは 2005 年 12 月開催の、**『愛、憎しみ、血の惨劇』**からで、今回で４回目を迎えます。このシリーズは、サブタイトルの頭に“愛”の文字が付されているので、我々は『愛シリーズ』と呼んでいます。

OPERA CONCERT ～愛・憎しみ：血の惨劇～

日時：２００５年１２月２日（金）午後６時半開演／午後６時開場
開場：すみだトリフォニーホール 小ホール

《プログラム》

1)　PAGLIACCI　Leoncavallo
『道化師』 レオンカヴァルロ　　伴奏：亀井奈緒美
道化師トニオの口上 “ごめん蒙りまして”　　佐藤 光政

2)　DON GIOVANNI　Mozart
ドン・ジョヴァンニ　モーツァルト　伴奏：亀井 奈緒美＆藤川 志保（１曲）
No. 7　二重唱（ドン・ジョヴァンニ＆ツェルリーナ）松浦 豊彦＆渡辺 裕子
“手を取りあって誓いを交わそう”
No.12　アリア（ドン・ジョヴァンニ）“シャンペンの歌”　松浦 豊彦
No.13　アリア（ツェルリーナ）“ぶって、ぶって！マゼット”渡辺 裕子
No.17　アリア（ドン・ジョヴァンニ）“セレナード”　松浦 豊彦
No.18　アリア（　〃　）　“この横町からあちらへ行け”　松浦 豊彦
No.19　アリア（ツェルリーナ）“もしもあんたがおりこうさんに..”　渡辺 裕子
No.25　アリア（ドンナ・アンナ）“いまも変わらずに愛する”
矢数典子　伴奏 藤川志保

3)　RIGOLETTO　Verdi
リゴレット　ヴェルディ　　伴奏：亀井奈緒美
No.9 アリア　“麗しき御名”（ジルダ）　島 信子
No.12　“あくまめ鬼め”（リゴレット）　水野賢司
No.14　二重唱 “いつも教会へ..”　島 信子＆水野 賢司

4)　OTELLO　Verdi
オテロ　ヴェルディ　　伴奏：北川葉子
“柳の歌”、“アヴェマリア”（デズデモーナ）　金子 直美

5）CARMEN　Bizet
カルメン　ビゼー　　伴奏：北川葉子＆藤川志保（１曲）
No.5“　ハバネラ”（カルメン:)　田辺 いづみ
No.14　“闘牛士の歌”（エスカミリオ）　佐藤 光政
No.17　“花の歌”（ドン・ホセ）　土屋 清美
No.22　“ミカエラのアリア”　矢数典子　伴奏：藤川志保
No.27　最後の二重唱　土屋清美＆田辺いづみ

司会：佐藤 光政

◆◆◆

１）オッフェンバック　『天国と地獄』より　“ギャロップ”
電子オーケストラ＋合唱

２）ロッシーニ　『セヴィリャの理髪師』　（抜粋）歌唱部伊語
G. ROSSINI　“IL BARBIERE DI SIVIGLIA”
No.4　フィガロ（カヴァティーナ）“おいらは町のなんでも屋”　佐藤光政
No.7　ロジーナ（カヴァティーナ）“今の歌声”　村上貴子
No.9　二重唱（フィガロ、ロジーナ）　佐藤光政、村上貴子
No.16 ベルタ（アリア）　太田智子
おまけ曲（本番のお楽しみ）　太田智子

----------（小休憩）----------

３）J.シュトラウス　『こうもり』　（抜粋）　歌唱部独語
J. STRAUSS　“DIE FLEDERMAUS”

No.1a　二重唱　（ロザリンデ、アデーレ）　金子直美、島信子
No.3　二重唱（ファルケ、アイゼンシュタイン）石川雄蔵、神林紘一
No.4　三重唱（アイゼンシュタイン、ロザリンデ、アデーレ）
神林紘一、金子直美、島信子、
No.9　二重唱（ロザリンデ、アイゼンシュタイン）金子直美、神林紘一
No.10　アリア（チャルダッシュ）ロザリンデ　金子直美
No.11　アリア→合唱　石川雄蔵他→合唱
No.16　最後の合唱

----------（休憩）----------

４）レハール　『メリー・ウィドウ』　（抜粋）　日本語公演
F. LEHÁR “DIE LUSTIGE WITWE”

No.4　アリア“祖国のためなら”（ダニロ）　佐藤光政
No.5　二重唱（ヴァランシエンヌ、カミユ）　長谷川実美、神林紘一
No.7　森の乙女の歌（ハンナ）　島田祐子
No.8　二重唱「間抜けな騎兵の歌」（ハンナ、ダニロ）　島田祐子、佐藤光政
No.11 二重唱とロマンス（ヴァランシエンヌ、カミユ）　長谷川実美、神林紘一
第三幕はすべて演奏する
No.14 シャンソン　（ヴァランシエンヌ（長谷川実美）＋合唱（斉唱）
No.14 a　回想　（合唱）
No.15　二重唱　（ハンナ、ダニロ）　島田祐子、佐藤光政
No.16　大詰めの合唱（ハンナ→ツェータ、ダニロ→合唱）
島田祐子→石川雄蔵→佐藤光政→合唱）

司会：佐藤 光政／演出：島 信子／企画・構成：中島　洋一

◆◆◆

１）オペラアリアの楽しみ

モーツァルト　歌劇『ツァイーデ』より　“安らかにお休み、私のいとしい命よ”

Mozart　[ZAIDE]　～　“Ruhe sanft mein holdes leben”

歌：山下 美樹（ソプラノ）　ピアノ伴奏：亀井 奈緒美

プッチーニ　歌劇「ボエーム」より　“私の名はミミ”

Puccini　[BOHÈME] ～　“Mi Chiamano Mimi”

歌：武田 麻衣（ソプラノ）　ピアノ伴奏：亀井 奈緒美

２）ヴェルディ　『椿姫』　より

Verdi　“LA TRAVIATA”

① 乾杯の歌（第１幕 第２景）　歌：佐野友美／加藤太朗、

② ああそは彼の人か～花から花へ（第１幕 第５景）　歌：佐野友美

③ ひとりきりじゃ面白くない、今の毎日は（第２幕 第１景）歌：加藤太朗

④ プロヴァンスの海と陸　歌：佐藤光政

⑤ パリを離れて　歌：佐野友美／加藤太朗

配役：ヴィオレッタ：佐野友美(Sop.)／アルフレード・ジェルモン：加藤太朗(Ten.)

ジョルジュ・ジェルモン：佐藤光政(Bar.)／ピアノ伴奏：亀井奈緒美

----------（休憩）----------

３）フンパーディンク　『ヘンゼルとグレーテル』　日本語公演

Humperdinck　“H ÄNSEL UND　GRETEL”

① 第１幕～第２幕

----------（休憩）----------

② 第３幕

配役：ヘンゼル(M.S)：湯川亜也子／グレーテル(Sop.)：佐々木寿子

父親ペーター（Bar.）:佐藤光政／母親ゲルトルート(M.S.)：増田浩子

お菓子の魔女(M.S.)：花田愛

眠りの精(Sop.)：武田麻衣／ 露の精(Sop.)：山下美樹

お菓子の子ども達＆天使達のパントマイム

児童合唱団　市川コーロ・バンビーニ／合唱指導＆指揮：渡辺裕子

合唱出演者

赤木悠子、秋本伊織、秋本陽彩、東屋海来、石橋久瑠実

石橋果輪、磯貝智花、岩崎悠里、大橋奈莉、加藤未紬、

菊池綾花、菊池侑梨伽、熊谷友希、倉島夏未、坂本安里紗

坂本芹佳、坂本光衣菜、佐藤春菜、増永優実、松原杏莉、

服部泰河、服部響巳、渡辺せいら

リコーダー演奏：佐藤幸子／電子オーケストラサウンド制作：中島洋一

舞台美術制作 協力・指導：菅原順一

司会：佐藤光政／ピアノ：伴奏　亀井奈緒美／ 演出：島信子

制作：浦富美／舞台監督：橘川琢／企画・構成：中島 洋一

+★+☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆★+*☆

《10月～12月の日本音楽舞踊会議関係のコンサート情報》

（※★印と下線で示してある催は、本会主催公演です。）

【10 月】

9日(金)　深沢亮子ピアノリサイタルvol.5

【カワイ表参道コンサートサロンパウゼ　19：00～　前売4,000円他】

9日(金) Wiz Friday concert 北川暁子・靖子姉妹による　ピアノとヴァイオリンの名曲の夕べ

(メンデルスゾーン「ヴァイオリンとピアノのためのソナタ」ほか)

【中野区野方区民ホール　19:00開演　前売り1,300円ほか】

11日(日) 橘川琢作品演奏－扇田克也＋木部与巴仁「ユメノニワ」

(組曲「都市の肖像」第二集《摩天楼組曲》補遺 ほか)【カフェ谷中ボッサ　開演18:00　2,500円（要予約)】

18日(日) 広瀬美紀子リサイタルーヴィラ＝ロボス没後50年記念コンサート　(曲　：ブラジル風バッハ第四番・第五番ほか・出演：広瀬美紀子ほか)【東京オペラシティ・リサイタルホール　14:00開演　前売り3,500　　円ほか】

23日(金)チャリティーコンサート

（出演：太田恵美子（Pf.）・八木宏子（Pf.）ほか・曲：モーツァルト：ヴァイオリンソナタ（K.378）ほか）

【調布市グリーンホール（小）　19:00開演　一般2,500円ほか】

26日(月)★20世紀以降の音楽～様々な音の風景Ⅵ

出品者：高橋 通、木幡由美子、北條直彦、助川敏弥、鈴木 登、ロクリアン・正岡　桑原洋明、シュニトケ（演奏：北川靖子）

すみだトリフォニーホール　18;45 開演　前売:3,000 円、当日売：3.500 円

27日(火)　深沢亮子-日墺協会

(読響の管楽器の方々とモーツァルトピアノと管弦楽のための五重奏曲ほか)

【目黒　久米美術館　18：00～】

【11 月】

6日(金) ★公演企画部主催　第2回フランス歌曲研究コンサート

《ガブリエル・フォーレの夕べ　Ⅱ》

●重唱を中心に　　伴奏　稲葉千恵

恵み深き御母，マリア Op.47_2 **(坪野智子、小林由香)**

アヴェ・ヴェルム・コルプス Op.65_1　**(坪野智子、小林由香)**

サルヴェ・レジナ Op.67_1 **(増田浩子)**

アヴェ・マリア Op.67_2 **(湯川亜也子)**

この世のすべての魂 Op.10_1 **(坪野智子、小林由香)**

タランテラ Op.10_2 **(増田浩子、花田愛)**

ラシーヌ讃歌 Op.11 **(秋山理恵、増田浩子、花田愛、湯川亜也子)**

★フォーレの音楽と作曲技法について　　中島洋一

●歌曲　　伴奏　森田真帆

- **花田 愛(Sop.)**：蝶と花 Op.1_1／五月 Op.1_2／ある僧院の廃墟にて Op.2_1
- **湯川 亜也子(M-Sop.)**：秋の歌 Op.5_1／オバド Op.6 _1

•**増田 浩子(Sop.)**：リディア　Op.4 _2／　愛の夢 Op.5 _2／シルヴィー Op.6 _3
•**秋山 理恵(Sop.)**：夢のあとに Op,7 _1／讃歌 Op. 7_2・舟歌 Op.7 _3
【中目黒GTプラザホール　19：00～】
一般：2000円／学生：1000円／会員・賛助会員：無料

8日(日) 西山淑子作曲－　ミュージカル『ありがとう　北里先生～伊東だけが知っている北里柴三郎物語』～第24回国民文化祭しずおか2009～（演奏：西山淑子／福地奈津子（エレクトーン）ほか）
【伊東市観光会館大ホール（静岡県伊東市）14:00/18:00（２回公演)】

8日(日) 日本電子キーボード学会　第５回全国大会
文教大学越谷キャンバス　10:30～19:30

9日(月) 深沢亮子　ピアノリサイタル
デビュー55周年記念Part2　～ブリュッセル弦楽四重奏団とともに～
(曲：ドヴォルザーク　ピアノ五重奏曲　イ長調　作品81ほか)
【浜離宮朝日ホール　19:00開演　5,000円(新演奏家協会03-3561－5012)】

16日(月)深沢亮子　翔の会　公開レッスン
【コトブキDIセンター　10：00～13：00】

20日(金) **★若い翼によるCMDJコンサートⅡ**
《プログラム》
①プーランク:「主題と変奏」小崎麻美(Pf.)
②リスト:リゴレット・パラフレーズ　上埜マユミ(Pf.)
③フォーレ:「この地上ではどんな魂も」
ドリーブ:歌劇「ラクメ」より「おいで、マリカ」（花の２重唱）
吉水千草(Sop.) 武田麻衣(Sop.) 森田真帆(Pf.)
④ラヴェル:ピアノ協奏曲ト長調第一楽章(マリンバ版編曲、北條直彦)
神尾　弥(Mar.) 立花瑠理(Pf.)
⑤桑原洋明:ピアノ・ソナタ「伊勢之海」 第1,2,3楽章　鈴木菜穂子(Pf.)
⑥グリーグ:ピアノ協奏曲Op.16第一楽章イ短調　廣瀬史佳(Solo Pf.)
⑦同 第二・第三楽章 イ短調
栗栖麻衣子(Solo Pf.)榎本美那子・小倉里恵(エレクトーン・オーケストラ)
【すみだトリフォニー小ホール１９：００開演　】

23日(月・祝)助川敏弥作品演奏－ViorinとPianoのための「草原の家-Andrew Wyethに」-初演)【時刻、会場、未定】

24日(火) 2009北川暁子ピアノリサイタル
(曲：イサーク・アルベニス「組曲　イベリア」)
【東京文化会館（小）　19:00開演　一般5,000円ほか】

29日(日)恵藤久美子・安田謙一郎・深沢亮子によるソロと室内楽の午後　(曲：ベートーヴェン／ピアノ三重奏曲“街の歌”第四番・安田謙一郎／月の影ほか)【藤沢リラホール　15:00開演　一般4,000円】

30日(月)助川敏弥作品演奏-　CD発売の記念演奏会。劉薇による日本Violin曲集。「竜舌蘭」演奏。【19:00開演、浜離宮朝日ホール】

【12 月】

3日(木) 並木桂子企画－　作曲家シリーズⅢ　《メンデルスゾーン》
（ピアノソナタ、無言歌　ほか。出演：並木桂子（Pf.）他）【ムジカーザ（代々木上原）開演19:00　3,000円】

5日(土) クラシックと能楽
（出演：北川暁子（Pf）・北川靖子（Vn）ほか・曲：C．フランク：ヴァイオリン・ソナタ　ほか)【セルリアンタワー能楽堂　14:00開演　8,000円】

7日(月) ★作曲部会公演「初冬のオルフェウス」～ソロと室内楽の夕べ～

《演奏予定曲》

浅香　満：・間奏曲・２つの間奏曲・４つの間奏曲（Pf.神田麻衣）

金藤　豊：ビオラソロによるレクイエム「亡き姉のために」
（Vla. 飯田　隆）

橘川　琢：未定

木幡由美子：「２つのヴァイオリンのための＜モノクローム＞」
（vn.　野澤　玲子、平岡　明子）

島筒英夫：ピアノ・語り・一人二重奏「世界がもし１００人の村だったら」
池田香代子（再話）/ C.ダグラス・ラミス（対訳）　（Pf.＆ 語り：島筒英夫）

助川敏弥：ヴァイオリンとピアノのための「美しき夕暮れ」-初演
（Vn.劉薇　Pf.椎野伸一）

高橋通：バイオリン独奏のための＜組歌＞
～上演形式“５丁目の秋の夕暮れの中で”　Vn.大島晶子

ピアソラ：天使のシリーズより（北條直彦　編曲）Pf. 広瀬美紀子

【中目黒GTプラザホール19：00開演　】
入場料：3,000円

8日(火)深沢亮子－朝日カルチャーセンター レクチャーコンサート【13：00】

12日(土)深沢亮子演奏－麦の会主催「社会福祉法人〈緑の風〉を応援するチャリティーコンサート」（ハイドンとメンデルスゾーン）　【津田ホール　開演14：30　入場料5,000円】

18日(金)★深沢亮子・恵藤久美子・安田謙一郎
～ピアノとヴァイオリンとチェロの夕べ～

《演奏予定曲》

①シューベルト：ソナチネ第1番 Op.137-1 D.384（for Pf.&.Vn)

②メンデルスゾーン:17の厳格なる変奏曲 Op.54

③安田謙一郎:“つきの影”

④モーツアルト:ピアノトリオ　デイヴェルテイメント第１番　K.254　他

【音楽の友ホール19：00開演　一般4,500円】

☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆★+*☆

★ 編 集 後 記 ★

今回は、昨年 10 月発行の第 13 号と同様、１年振りのオペラコンサート特集号です。10 月８日（木）に、すみだトリフォニーホールで公演される【CMDJ2009 年オペラコンサート～愛の喜びと悲しみ】を紹介する記事だけでなく、オペラ演出家；中村敬一氏の記事、今度二期会オペラで蝶々夫人役でデビューする文屋小百合さんへのインタビュー記事などが掲載されております。

また、2005 年以来、“愛”の文字ではじまるサブ・タイトルを持つオペラコンサート（愛シリーズ）も、今年で４回目を数えます。それで、過去３回のプログラムを再掲載し、振り返ることといたしました。来年も“愛”の名前を付したシリーズとなるかどうかは判りませんが、**9 月２２日（水）**に、同ホールにおいて、CMDJ オペラコンサートを開催することは、すでに決定しております。

また、現在、来年の前期開催をめざし**【18、19世紀の西洋史と音楽家達（仮題）**というタイトルで、研究会を定期的に開催する計画が進行中です。第１回は『ウィーン：ハプスブルク王朝時代の文化と音楽家たち』というタイトルで、17～20世紀初頭のウィーンの歴史と文化を中心とした研究会となる予定です。

原稿がそろえば、研究会を中心とした特集号の発行も検討してみたいと思います。

また、それ以外の読者の方々の投稿もお受けいたしますので、どうぞ、**yoichi_n@wa2.so-net.ne.jp** 宛に、原稿をお送りください。なお、投稿は原則としてメール投稿（word などのファイルでの添付は可）のみといたします。理由は手書きや印刷物でお送りいただいた場合、再打ち込みの労力の手配が不可能だからです。もちろん、ＦＤ、CD-ROM などのメディアに保存してお送りいただいた場合は、支障がない限り、お受けしたいと存じます。。

また、来年の３月末には、例年通り、第８回を迎えるフレッシュコンサートの特集号も発行する予定です。

ささやかなメールマガジンですが、本会の新しいスローガン***『文化創成！』***の一翼を担う活動として、このメールマガジンを読者の方々とともに、育てて行きたいと願っております。

編集責任者：中島　洋一

メールマガジン版『音楽の世界』第 **15** 号

２００９年 10 月 3 日　発行

発行：日本音楽舞踊会議／月刊『音楽の世界』

The COMMITTEE of MUSIC and DANCE JAPAN

〒169-0074 新宿区北新宿 2-25-8　FAX 03-3369-7496

http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/　E-mail: **onbukai@mua.biglobe.ne.jp**

編集責任者：中島　洋一

〒 190-0031　東京都立川市砂川町　5-36-3

電話&FAX 042-535-3294　携帯電話 090-7904-1726

Ｅ-mail：　**yoichi_n@wa2.so-net.ne.jp**